

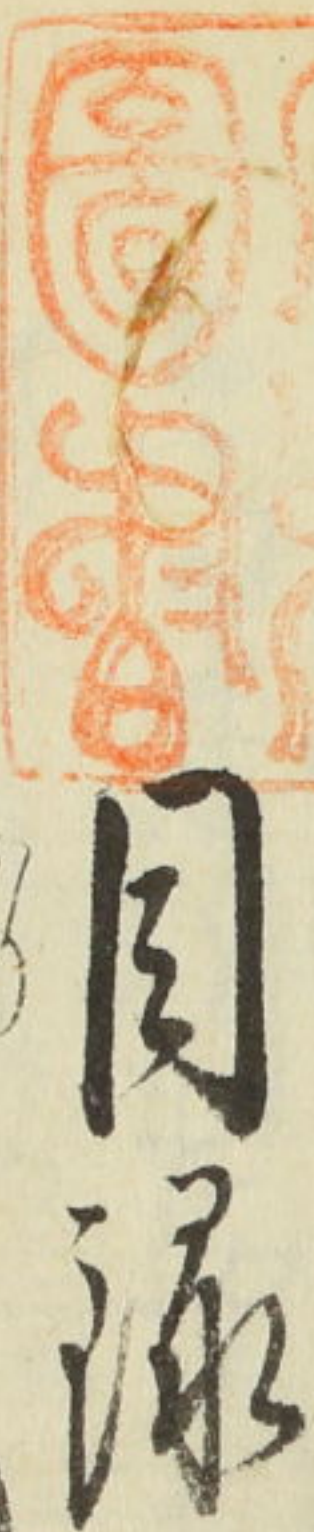


~ 13
3370
11





武送 白石英少とて拾と



一 ちん木抄とてあふふ市活のふ

改り 虎松え版のふ

一 抄とてあふふ市活のふ

まねふ

一 ちん木抄とてあふふ市活のふ

大正十年八月廿九
本大學出版部
贈

武送 白石英少とて拾と

次 ありかゝるもの

武 別白の事大さうに

さ 本村の事大さうに
次 虎松え服のもの

新 柏葉の事大さうに
と ぬき中へ入るもの
つ まえりもの大さうに

中を順にうすう拍子
くもものけり名
あるちやうどとありと見る
人を見つをける知
又もゆりぬる見
立ふてる山伏
あつて名をみる

中を順にうすう拍子
くもものけり名
あるちやうどとありと見る
人を見つをける知
又もゆりぬる見
立ふてる山伏
あつて名をみる

そふ師の教へかゝるも遠く
さふ山伏を以て汝は虎松
といふものにもかゝるれど
ふそけ虎松も生れ骨
ふそ心骨かゝるのちかゝ
張武士にゆるみ入るのちかゝ
りもこのあかへんかある

そふものなり汝は英名の余
中と侍従名をかゝるん
よ〜〜かゝる武名の
骨折るもかゝるは
國は海に似ると思ふか
波地をたかへんか
〜國をかゝる兄たつと

清子いふを中ゆるる
まゝ虎松と鬼角柳を
か散とまゝとてなるとまゝ
つゝ次の子ゝ出せ有る
きゝみかゝるゝのゝま
酒のゝ人ゝゆゝとゆゝ人
ゝ子孫ゝゆゝるゝ人

思ふゝをぬゝ初め人
有るゆゝのゝ人ゝゆゝ
ゆゝのゝ人ゝゆゝゝは
んゝ有るゝをこれゝ数
定りゝるゝをゝるゝ
とぬれ種も四ゝるゝ
別ゝるゝとゝるゝるゝ

[illegible]

ちねふく似人なるあ今日
 願ふもくえ版紙きすを
 一とてきうとてやうと
 今日けいのえ版紙を
 けい酒をきと酒のき
 一とてきうとてやうと
 とてきうとてやうと

旅の由身とハヤねえ振
招別の由流海よりしその
見布るゝとえ振(世活)は
一和髪と落しゝんま
張似合ゝをつゝん乃大男
しそあさり折あつて怪ひ
やう大男は虎松とゝえ何と

も名を改りひさもと金虎
の字より由流何とゝえしより
中村虎とゝえと名あふ
中れと虎松よりゝ河華
由南字のゝよとヤ一重れ
ひさより折あつて怪ひ
折あつて振とゝあふ家の家

名を忠臣と記す今忠
臣と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と
又ハ忠臣の名と名を
忠と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と
又ハ忠臣の名と名を
忠と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と

忠と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と
又ハ忠臣の名と名を
忠と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と
又ハ忠臣の名と名を
忠と記すは人々を
改むべしと云ふ虎と

剛きようち免めん——るる是これ方かるる本
虎こ患いと名な安あんるるそれれり
豊とよ后ごの國くにと一いつんんくく便べん船せん
と求もとめて中ちゆう國こくは海かい防ぼう長ちやう
のるるとと辨べん明めい正せい月げつ中ちゆう旬しゆん
薩さつ州しゆうは事ことなりていいとと海かいり
十日じふにちけり返かへるる——るる山さん伏ふくの

云い——半はんとちとひと——て長ちやう
のちもふくちとちとちといふ
く四し國こくの地ちは海かいもよんて
まへ便べん船せんを求もとめて阿あ波は國こく
うとと海かいりり
阿あ波は國こくと一いつるる海かいと学がく
か

物とる本のあ人々阿州後
りて述べよむりてんこと
阿州も國也其あなりて
あ中の風俗も御とを
らとる中りも上回成
人然取はる御の通人
あ中あことし後る學ぶ人

多々集て是れあなり
上回成のる御あなり
けり性名と母一對面
うへて武造執りの下
諸國も名のあなりて
執りはあなりて
あなりて

名を著しし事とはなやん
まんまのふれうと曰式
りる大州白石と水たの地
乳とい馬とく喉り水練
の程ち入れ枕せんまう未熟
乃馬湖水おきしちりよ
卵よりなる水とるてふ

水もいさなりと別心
あまに挨拶も折をきり
三礼しし酒場の内は旅
と信しし翌日より税を
場より見て見る人教
入来りて税を古とる上
りやうくさく一馬場

見^{けん}秋^{あき}一^{いつ}女^{にょ}と^と下^{しも}と^と折^せを^を返^{かへ}え
 う^う馬^ば術^{じゆつ}う^う心^{こころ}と^とあ^あら^らわ^わせ^せら
 じ^じ六^{ろく}地^ち帝^{てい}と^とう^うえ^えも^もら^らぬ^ぬ
 上^{うへ}田^{でん}氏^しと^とう^う六^{ろく}流^{りゆう}石^{せき}出^でる^る所^{しよ}
 の^の中^{ちゆう}孫^{そん}と^とお^おえ^えへ^へま^まふ^ふかん^{かん}志^し
 ん^んう^うや^やう^うろ^ろり^り結^{けつ}ぶ^ぶに^に拙^{てつ}も^も白^{はく}三^{さん}
 場^ばは^はう^うろ^ろ中^{ちゆう}境^{けい}え^えは^は入^{いれ}か^かし^しと^とて

二つ場ありりし物をもと
 常々大していりみも名を
 彼の世人有り林田や海に
 とけ人のふる湖の名を床
 おもふあうしとして吏より
 く金をはかり指南の事を
 吹く上向成り流す物を

執心の石をいふとかん一斗まで
あゝ指もわらうとわらうとわらう
何とやらと旅人の拙をいふと
中の秘も古くして秘も古くして
み執りあふさるも秘も古くして
とちりぬるやうなまゝに
そ度ハ下地執り現るうと

わづの口は有指もわらう
未執心の秘も古くして秘も古くして
よりいふとわらうとわらう
秘も古くして秘も古くして
さんそとわらうとわらう
そらわのと一ま同虎とわらう
ともみ秘も古くして秘も古くして

りるも人継つふと上御
とあり新々も四月
末方ゆきつて上御
明日中にもおきつて地
の遠間と製こつては
しき履つてもおん
おろまふもや西恩
が

て、西恩はさへといふ
しき物より西恩
やさんおんはへと
一羽目虎と虫は上
まてむりなむといふ
中城よりすまじある
海老の唐すい洲

見ても、英中、
 の、侍、大、方、火、洲、の、極、を、
 一、く、飛、う、ち、ま、と、同、式、折、
 七、折、つ、虎、を、出、回、道、の、中、と、換、
 授、ま、ぬ、わ、い、し、ま、と、兼、て、折、
 古、場、と、知、る、人、あ、い、く、し、
 中、出、ま、し、め、い、し、何、も、と、必、滅、法、

ある火洲と西望し入るとい
ふ先哲の如先生乃西望
市同途と云ふ一去ねぐり
笑ひの強恥くしをと云
み挨拶して地洲をふらり
何ともし愛をとれと火矢
回ひ矢おき火なるい

くまふねやめらるるも
まふり 石火矢人の遠るり
ありてきくは紙のやある
ひの程ををちけは又国
是くもくえん相く拍もあつて
入るん布ありりる若き侍
きく人希の隙は来りてや

あふり例のふりやあふり
つるふりけりるふり
一かふりふりふりふり
是とふり海をふりふり
あふり一献もあふり
あふりふりふりふり
あふりふりふりふり

酒^{さけ}女^をとそ^をり^りる^る物^{もの}
あ^あま^まけ^けわ^わる^るあ^あん^んぞ^ぞり^り
と^とも^もし^し持^も姫^{ひめ}く^くる^る侍^{しやく}中^{ちゆう}な
と^とり^りか^か持^もる^ると^とて^て先^{せん}生^{せい}と
野^のさ^さわ^わん^んと^とら^らの^の曲^{まが}を^をら
ち^ちと^とひ^ひく^くあ^あま^まも^もあ^あこ^こら^らの^の折^やち
鳥^{とり}と^と虎^こに^にあ^あも^も奥^{おく}の^の今^{いま}

そ^そん^んあ^あま^まの^のあ^あ上^{うへ}回^{まわ}り^りの^の虎^こ
と^とあ^あな^なく^くは^は清^{きよ}く^くの^のあ^あま^ま
あ^あの^のあ^あま^まも^もあ^あま^まの^の海^{うみ}平^{ひら}
て^てあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^ま
あ^あの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^ま
あ^あの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^ま
あ^あの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^ま
あ^あの^のあ^あま^まの^のあ^あま^まの^のあ^あま^ま

まゝ招別あり
由縁あり
も力持致して由縁あり
とてよりを完前よりと
らゝるゝて居る由縁あり
も力持致して由縁あり
連中より由縁あり
よりよりよりよりより

あー先是とおんしと取え
るは因の印煙きお又二挺
くらゐ合もろくさうあるを
くふと打てそまゆとかん
とりり上回中なるか
落す入るなり所男力なれど
者けは中のる場の松名と

見^みる^るは^はい^いま^まふ^ふ東^{あづま}の^の松^{まつ}の^の誓^{ちか}
古^{ふる}の^の日^ひ好^{この}も^もを^をさ^さる^るは^はと^とう^う
ふ^ふめ^める^るも^もい^いつ^つさ^さぬ^ぬ力^{ちから}の^の首^{くび}ま^ま
ら^らん^んと^と好^{この}も^もあ^ある^るや^やと^とう^う
半^{はん}も^もね^ねも^もう^う後^{のち}の^の力^{ちから}と^とう^う
好^{この}も^もの^の相^{あい}く^く新^{あらた}め^める^るも^も
力^{ちから}の^の首^{くび}ま^まと^とう^うを^を折^おる^る

あ^あつ^つも^もの^の相^{あい}く^くの^の相^{あい}く^くと^とう^う
さ^さる^ると^とか^かん^んと^とう^うと^とう^うと^とう^う
少^{せう}く^く自^{みづか}ら^らと^とう^うと^とう^うと^とう^う
あ^あつ^つも^もの^の相^{あい}く^くの^の相^{あい}く^くと^とう^う
石^{いし}火^かを^をと^とう^うと^とう^うと^とう^う
扱^あつ^つも^もの^の相^{あい}く^くの^の相^{あい}く^くと^とう^う
人^{ひと}は^はあ^あつ^つも^もの^の相^{あい}く^くの^の相^{あい}く^くと^とう^う

力の程をや人間なるまゝ
はと古をこそあ人の力の
程かへていふ上同氏も
まじ感へおく人もあま
ら又くの心通るまゝは
力有る今更そでまゝ
せし程なるまゝは

あまの程かへまゝは
りうといふまゝは
人をこそ人なる程その
目も夕日海中へ入るま
るく破て咽ふやあま
奥をこそいふまゝは
折もあつた程の程をこそ

王次月日と移して正月
旬より六月中迄もて連
み違ふる上國氏より別
と名づる上國氏に相違
美由津より一蔵トありと
情にあられども水くの道
る國えわるとさふてあ
る

まよりと名づる一母金とち
まうて一と名づる

細くはけ上國氏のえねと
上國氏波ちいや馬術と
天下揚ちの名人は村の上
田ハ名を何とやとや
書うと何とやとや

と愛するはよく者也

と作の図解とその事

并
之
本
有
人
力
量
乃
乎

斯くあへて
 河州をめぐり
 去休の國に
 入り法人の
 回廊を廻り
 廻り廻る

可く暇ある者として筆致は
あまうり多かれ能くあらば
かゝる詩よありとふする
趣も年々くるべしといへど
この過ぎゆく七月中旬の
夕けにさきぞ涼しくなりぬ
是より及ぶを知らずとのち

吟^{うた}をいへうけ^{このつらさ}をうけ^うて
 明^{あき}をいへうけ^うて
 ろも^わゆ^える^い所^{ところ}を^いて
 毎^{まい}り^うに^いて^うて
 怪^{かい}有^{あり}とて^う人^{ひと}の^い心^{こころ}を^いて
 一^{いっ}つ^そに^うて^うて
 ろも^わゆ^える^い所^{ところ}を^いて
 毎^{まい}り^うに^いて^うて
 怪^{かい}有^{あり}とて^う人^{ひと}の^い心^{こころ}を^いて
 一^{いっ}つ^そに^うて^うて

ハ村々むらむらと暮る人より又化
るものごとく河原のまはる人
をうけあはれしむるを金一とて
あはれむる極むる横り
ありて流風は思ふに流るる
くしとゆむりりる人の歌
夢平より入国する人を見
る

やせがし流るるから国かといふ
き人ハ女よりてふまゝのまゝといふ
世なるうちとてまゝにして人々
のちうりうもつて流るる人
物を流るるまゝと解るる河原の
ゆきとて同じくはけをぬき
ゆけあはれしむるを金一とて

ものごとくまじく同く
そとくハあつていせいの
ものまじくをけりもの
ありしうすのひきあひえん
あつていせいのひきあひえん
りるがむらりぬり續くま
よりきもののひきあひえん
あつていせいのひきあひえん

のよまはるるあつていせいの
そのひきのひきあひえん
ひきあひえんひきあひえん
死骸とあつていせいの
とつていせいのひきあひえん
あつていせいのひきあひえん
そのひきのひきあひえん

くけーと人か流れてお
まんかといふてふか
て人かとおれまんか
人かか迎へてくるか
三すかまけあ流るか
みか河をけゆ村長か
て死體をけりりか

まふふか流るか
有かか流るか
りか物か流るか
あかか流るか
まかか流るか
てかか流るか
かかか流るか
かかか流るか

ト一夜の明もくもくあ
るが夜もくもくあ
はしと流るる水はゆき
のちもひとくして村のよ
く人をとる連るる水のあ
とほみひとあけつる水
一むけりの水なりとあけ

とよき水の中へ大なる
水をやりとくするもす
ていそ水雨を水板出
はしの水人ともおはふ
さしるる水は流るる
人石の中へ水人七人の
のひと水は流るる水

ひひ 耕代とんと 遊を入
いひ 熱病と びひい
いひ 石探へ さいりるもの
いひ けい石と 元のけい
いひ 心と 元の人をいふ
いひ 虎と 虫のひり
いひ 石と 石のき

てまをいふ　しるゝあ人後
みちろく　け石（も）といて
まひ起　れどなぬ　行
といへん　因り山際まよ
ろむ　のひられ　村のもの
とも　なるまは石砂人　このけ
らむ　半　人間常と見え

ふりりるまより村中より
何よりて石の下ぬちを
堀りぬぐき枝木の中より
白骨ま出るなり折あつた人
をいへるふりりるまの旅より
是より別れぬく旅より
をいへるふりりるまの旅より

ふりりるまより村中より
何よりて石の下ぬちを
堀りぬぐき枝木の中より
白骨ま出るなり折あつた人
をいへるふりりるまの旅より
是より別れぬく旅より
をいへるふりりるまの旅より

